

2025 年度日本看護系大学協議会 (JANPU) 災害支援対策委員会企画 災害フォーラム「看護系大学の防災を考える」開催のご報告

1. 開催日時

2026 年 2 月 14 日 (土) 13 時～15 時

2. 開催方法

Zoom ウェビナーによるオンライン配信

3. テーマ：「看護系大学の防災を考える」

4. 企画趣旨

近年、地震や感染症など大学の教育・研究活動に影響を及ぼす事態が相次いでいる。そのような中、学生の学びを途切れさせず教育・研究を継続する体制づくりが重要であり、防災対策や事業継続計画 (BCP) の整備は医療施設のみならず看護系大学においても喫緊の課題である。あいち・なごや強靱化共創センター長である福和伸夫先生のご講演による防災意識の啓発、会員校による大学防災に取り組む実践事例の紹介から危機対応力を高める目的で企画した。

5. 概要

本フォーラムは以下のプログラムで進めた。概ね予定時間通りにすべてのプログラムを進めることができたが、質疑応答は 10 分程度となった。

1) ご講演「大規模災害で災害医療を持続するために」

名古屋大学名誉教授 あいち・なごや強靱化共創センター長 福和伸夫先生

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2026/02/20260214saigaiforum-1.pdf>

2) 看護系大学の防災に関するシンポジウム「必ずくる震災に看護系大学が備えるために」

(1) 敦賀市立看護大学の取り組み

山崎加代子先生 (敦賀市立看護大学)

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2026/02/20260214saigaiforum-2.pdf>

(2) 愛知県立大学看護学部の取り組み

柳澤理子先生 (愛知県立大学)

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2026/02/20260214saigaiforum-3.pdf>

3) 2025 年度災害支援対策委員会ブロック活動の概要

災害支援対策委員会委員 竹本由香里 (宮城大学)

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2026/02/saigairenkei-block.pdf>

4) 質疑応答

福和先生のご講義の後とシンポジウム・ブロック活動の概要の発表の後にそれぞれ質問を受けるようにした。福和先生に対して、脆弱な地盤に立地する大規模病院の耐震化や国を挙げた対策強化の必要性について、日本における船舶医療体制の整備状況に関する質問があり、熱心に受講された様子が反映された。

<参加人数およびアンケート結果>

1. 参加人数

事前の参加申込人数は 378 名

当日の参加人数は 253 名（委員・事務局・話題提供者を除く）

2. アンケート結果

グーグルフォームでフォーラム終了直後～2月19日まで収集：回答者数 179 名

1) 回答者の属性

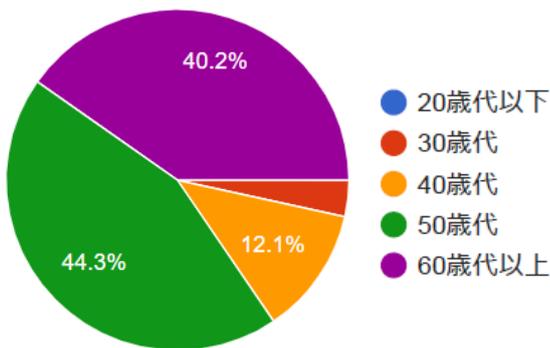


図 1 年齢

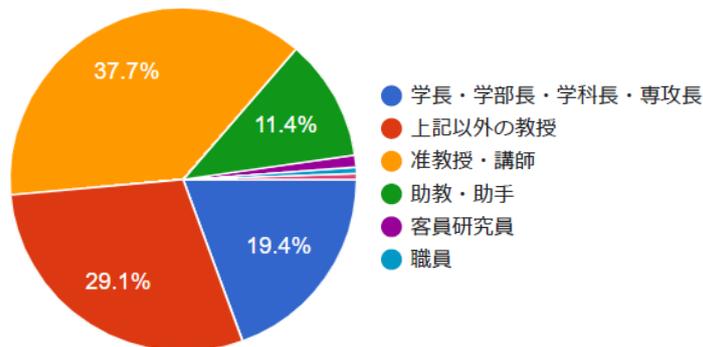


図 2 職位

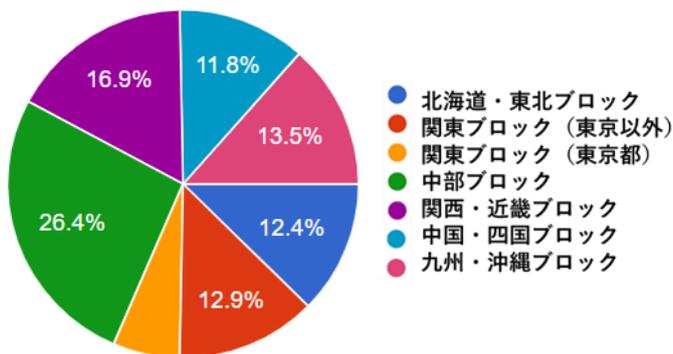


図 3 勤務・在学しているブロック

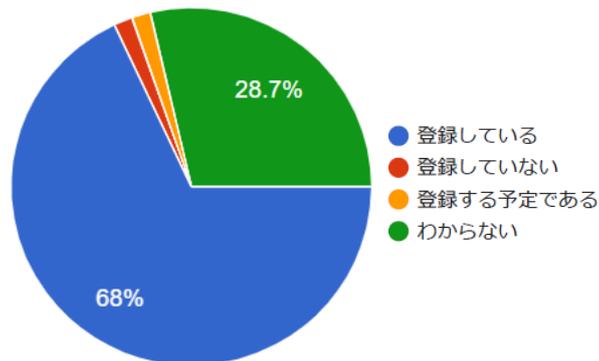


図 4 JANPU 災害連携の登録

2) ご講演「大規模災害で災害医療を持続するために」

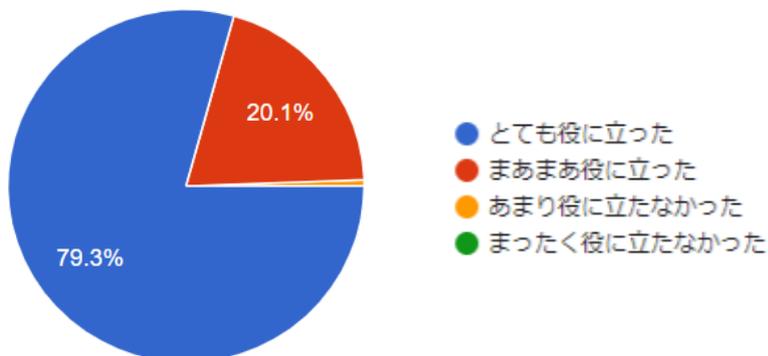


図 5 ご講演「大規模災害で災害医療を持続するために」

<役に立ったと思った事柄：109 件のまとめ>

・最も多くみられたのは「危機感の共有」と「事前の備えの重要性」に関するものであった。多くの参加者が、日本が災害に対して極めて脆弱な国であるという現実を改めて認識し、「対策は急務である」

「今すぐ準備しなければならない」という切迫感を抱いたと述べている。特に、「備えておいたことしか役に立たなかった」「本気になって考えないと命を失う」という言葉が印象に残ったという記述が複数みられた。

- ・次に多かったのは、「災害の歴史から学ぶ視点」に関する意見である。過去の災害史や地形、都市計画、土地開発の経緯といった歴史的背景を踏まえて現在を捉える構成に対し、「俯瞰的に理解できた」「未来を創造する視点を得た」「目からうろこの内容であった」といった評価が目立った。単なる事例紹介ではなく、歴史・建築・都市計画・政策を横断的に結び付ける視点が新鮮であり、理解を深めたとの声が多い。
- ・三つ目の大きな特徴は、「個人の備え」と「組織・社会の課題」の両面への言及である。個人レベルでは、「家具固定など身近な対策の不足」「自分が勤務先に行けるよう準備しておく必要」「自分と家族の命は自分で守る」という意識の変化が語られている。一方、組織レベルでは「病院の立地そのものが危険」「医療機関の脆弱性」「医療継続の困難さ」「現行対策は一回の地震しか想定していない」といった構造的課題への気づきが多く示された。特に、脆弱地盤や都市機能の集中といった立地問題への言及は頻出しており、病院自体が災害弱者になり得る現実が強く印象づけられたと考えられる。
- ・また、「行政依存からの脱却」というメッセージも繰り返し言及されていた。「国や行政を頼るのではなく、一人一人が自分事として考える必要がある」「本気になった個人が動くことが重要」といった意見があった。
- ・看護職・教育者としての立場に引き寄せた意見も多く、「看護学生に何を重点的に伝えるべきかが明確になった」「基礎教育から実践力を育成する必要」「人材育成が急務」といった教育的示唆が述べられている。災害時に医療を継続するためには、専門職としての備えだけでなく、自身の安全確保が前提であることへの理解が深まったとの声も多かった。
- ・特徴的な意見としては、「船舶医療」への関心が挙げられる。港の整備や訓練の必要性など、具体的政策に踏み込んだ感想が見られた点は印象的である。また、「過去の震災は人災であるという言葉が刺さった」「政治の見通しの甘さへの言及」「絶望感と同時に危機意識を持った」といった率直な感情表出もあり、講演が感情面にも強く働きかけたことがうかがえる。
- ・さらに、実際に被災地の病院勤務経験をもつ参加者から、「立地が運命を分けた」「事前訓練が人的被害を最小限にした」との具体的証言が寄せられていた。

3) 看護系大学の防災に関するシンポジウム

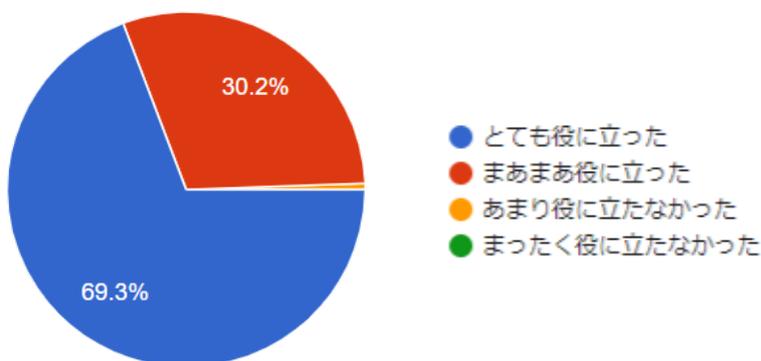


図6 看護系大学の防災に関するシンポジウム

<役に立ったと思った事柄：93件のまとめ>

- ・最も多く見られたのは「具体性への高い評価」である。多くの参加者が、「具体的でイメージしやすかった」「実践例が参考になった」「プロセスまで説明があった点良かった」と述べている。単にBCP（事業継続計画）の理念や必要性を語るのではなく、策定までの経緯、検討過程、訓練内容、発災時の動きといった実践的内容が共有された。

- ・「机上の空論では意味がない」「やってみて初めて課題が見える」「試験的運用で実効性を高めることが重要」といった意見である。防災訓練やBCP研修を実際に行ったことで、本部に教員が集まりすぎる、保護者からの電話対応ができない、マニュアルを理解しているがゆえの独自行動が生じるなど、想定外の課題が明らかになったという具体的報告に訓練を通して改善を重ねるプロセスこそが有効な備えにつながるという理解が広く共有された。
- ・次に多かったのは、「自大学の現状との比較・危機感の喚起」である。「本学の取り組みが遅れていることを再認識した」「絵に描いた餅状態であると痛感した」「恥ずかしくなるほど先進的だった」といった声が目立つ。発表校の取り組みを単なる成功例として受け取るのではなく、自校の課題を明確にする鏡として受け止めている。
- ・「大学の特性を踏まえたBCP策定」の重要性も頻出している。立地条件、地形的特性、大学本部とキャンパスの距離、規模の大小、単科大学であることなど、それぞれの状況に応じた計画づくりが必要であるという認識が共有された。特に、実習中の学生や学外にいる教員、移動中の教員など、看護系大学特有の「人の動きの複雑さ」への言及は特徴的であり、一般大学とは異なるリスク構造が意識されている。
- ・「地域との連携」に関する意見も多い。大学が避難所に指定されていなくても住民が集まってくる現実や、顔の見える関係性の重要性、地域ニーズを踏まえた準備の必要性など、大学が地域社会の一部として機能する視点が強調されている。被災地近隣大学の実体験から、事前準備が地域貢献に直結することが具体的に示された点は、参加者に強い示唆を与えている。
- ・学生への視点も大きなテーマである。学生主体の取り組み、学生への備蓄食配布、ロッカー内備蓄の推奨、アレルギー学生への個別対応など、教育機関ならではの配慮が評価されている。また、全学年を対象にどのように訓練を実施するか、災害教育をどのように基礎教育に組み込むかといった教育的課題への関心も高い。災害対策が単なる危機管理ではなく、教育的価値を持つ活動として捉えられている点が特徴的である。
- ・「組織風土づくり」への関心もみられる。BCP策定や研修を継続する中で、できていないことから目をそらさず、ゼロベースで見直す姿勢や、全学体制で取り組む文化の醸成が重要であるとの意見があった。単なる計画策定ではなく、組織文化の変革が必要であるという認識が示されている。
- ・特徴的な意見としては、発災後3時間の具体的行動計画、アクションカードの活用、スモークを用いた訓練、防火扉の実地使用、学生消防団員の設置など、非常に実践的な取り組みへの関心が挙げられる。また、研究費や保護者会費を活用した財源確保、維持コストへの関心など、運営面に踏み込んだ視点も見られた。

4) 2025年度災害支援対策委員会ブロック活動の概要

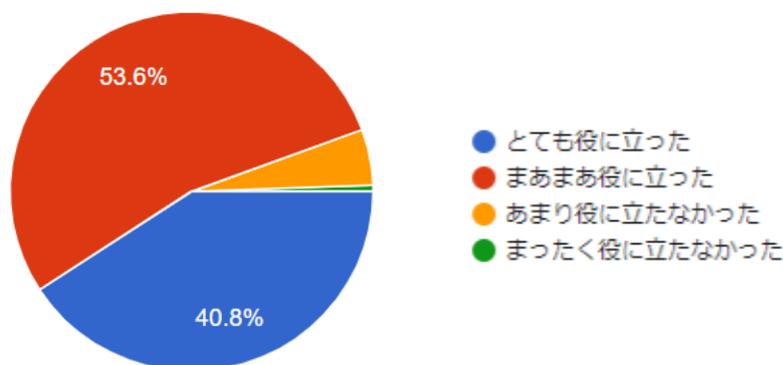


図7 2025年度災害支援対策委員会ブロック活動の概要

<役に立ったと思った事柄：57件のまとめ>

- ・今回の報告に対する意見で最も多かったのは、「全国的なネットワークの可視化」に対する評価であ

る。多くの参加者が、各ブロックでどのような体制が構築され、どのような活動が行われているのかを初めて具体的に知ることができたと述べている。「全国的に活動が行われていることを知った」「委員の顔が見えた」「活動内容を把握できた」といった意見があった。

- ・「ブロック制による協力体制」の重要性を評価する声が目立った。災害対策は全国一律ではなく、地域特性を踏まえた対応が必要であるという認識が広く共有されている。地震・台風だけでなく、火山噴火や原子力災害など地域固有のリスクを踏まえた備えが必要であり、鹿児島における桜島噴火や原子力発電所事故への言及など、具体的な地域課題を意識した意見も見られた。
- ・「情報共有と分析機能」に対する評価も多い。「タイムリーに調査していることが確認できた」「情報共有され分析もされていることが重要」との意見から、単なる連絡網ではなく、状況把握・検証・次への改善につなげる仕組みとして機能している点が評価されている。災害発生時の確認事項を整理し、次に活かすという循環型の活動に意義を見出している声もあった。
- ・「ブロック間の温度差」を懸念する意見も特徴的である。特に南海トラフ巨大地震の影響が想定される中国・四国ブロック、九州ブロックへの不安が示され、「一丸となった活動を望む」との要望もあった。
- ・「自大学への応用」という視点も多く見られた。他ブロックの活動を参考に、自大学や小ブロックでの取り組みに活かしたいという前向きな意見が複数あった。JANPUの会員校になったばかりの大学からは、災害連携教員としての役割や活動の方向性が見えてきたとの声もあった。
- ・被災した大学がどのように教育を継続するのかという課題や、災害後の授業・実習対応、学生支援など、BCP・BCM（事業継続マネジメント）の観点が挙げられている。大学防災は単なる安全確保にとどまらず、「学生の学びを守る」という教育機関としての使命に直結する課題であることが再確認されている。
- ・特徴的な意見としては、アクションカードの具体的活用（例：エレベーター内掲示）、生活に合わせたきめ細かな備え（アレルギー対応食など）への言及がある。「報告内容にやや具体性が乏しかった」との意見や、「ブロックごとの具体的対策をさらに聞きたかった」といった改善要望もあった。

3. フォーラムに関する質問、意見、感想

<感想・反省点・今後の課題等：52件のまとめ>

- ・最も多かった意見は福和伸夫先生の講演に対する高い評価と感謝の意見である。「大変重要な内容」「危機感が高まった」「認識を変えなければならないと感じた」「歴史的視点が重要」「建築基準等の話が参考になった」など、内容の専門性と問題提起の鋭さに強い印象を受けた参加者が多数を占めた。「自校で何をすべきかを考える契機になった」とあった。
- ・音声トラブルへの指摘があった。
- ・オンデマンド配信・アーカイブ希望の要望があった。理由としては、「業務との重複」「国家試験前日など日程上の制約」「音声トラブルで十分に聞けなかった」「学内共有のために再視聴したい」などであった。
- ・開催日程・形式については①肯定的意見「Zoom開催で参加しやすかった」「午後開催がよかった」「休日だから参加できた」、②改善希望「平日の方が若手教員は参加しやすい」「休日でない方がよい」「2～3月の平日開催が望ましい」「時間超過を改善してほしい」であった。
- ・大学の防災体制の現実的課題に踏み込んだ意見、①自大学の備え不足への危機感「マニュアルが整備されていない」「避難場所を知らない」「訓練が形式的」「どこまで準備されているか把握していない」、②業務過多とのジレンマ「教員業務は増える一方」「防災をどの程度のエフォートで担うのか困難」「防災担当教員に委ねられている現状」、③大学間連携の必要性「災害時に教育を継続する大学間連携」「顔の見える関係から一歩進んだ体制構築」「先進事例の継続的共有の要望」等であった。
- ・オンライン授業は単位認定上どの程度可能なのか」「文部科学省の方針はどうなっているのか」「南海トラフ地震に関して内閣府が教育機関に求めている役割は何か」もあった。

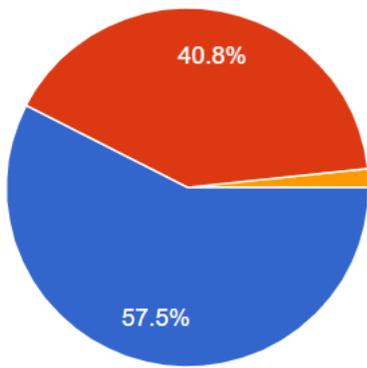


図8 2月開催への評価

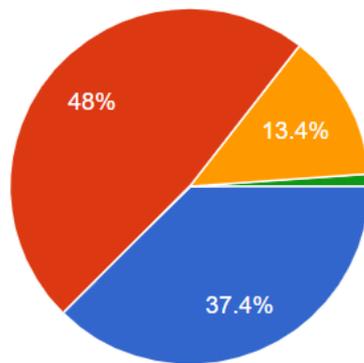


図9 休日開催への評価

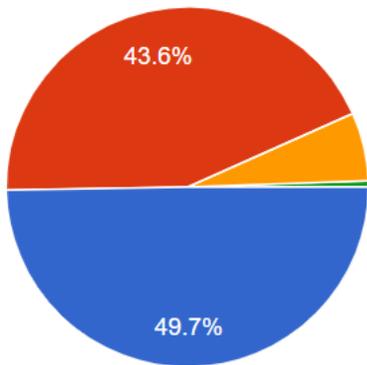
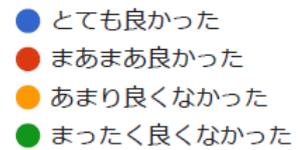


図10 午後開催への評価

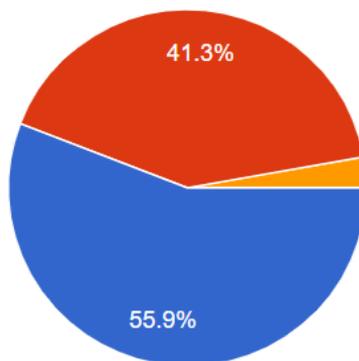


図11 開催時間(2時間)への評価

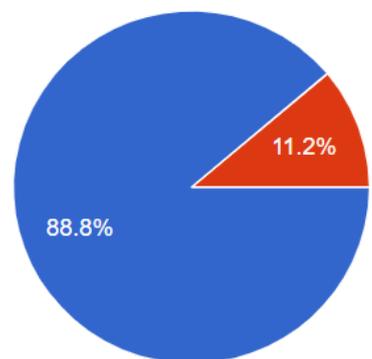


図12 Zoom開催への評価

<今後開催してほしい企画：26件のまとめ>

- ・学生への備えの促進に向けた活動・教育内容として、「学生への備えの促進に向けた活動」「災害教育（教職員、学生）」「各大学の災害教育」「災害対策や支援にかかわる科目や教育内容（学部、大学院、専門コースなど）」があった。
- ・大学で行う災害訓練の内容について「大学教員や職員への啓蒙活動の方法」「体感できる研修」があった。
- ・被災大学・支援大学の具体事例の共有「次々に震災が起きているので、被害を受けた大学や支援した大学の事例を継続して報告していただくことで、参加大学の力量が上がっていくと思う」「実際に被害にあった地域の大学の体制についてなど聞きたい」「実際に被災した大学が災害発生時にどのような対応を行ったのか、またその経験を踏まえて事前にどのような準備が必要となるのかについて、より具体的に把握した」等であった。
- ・各大学の具体的取り組み・先進事例の紹介「今回の様に、各大学の具体的な取り組みをご紹介いただくと参考になります」「毎回テーマに沿った事例紹介があった方が良い」「BCP への取り組みを継続して紹介していただきたいです」「今回のような BCP 策定や運用の実際、合意形成のプロセスも含めて具体的に伺いたい」「地域ブロックにおいて、連携した活動が行われている事例がありましたら、その活動の紹介」
- ・国内外の制度・研究・行政との連携として、「災害対策先進国、台湾等の災害支援の現状、連携を紹介していただきたい」「災害対策における最新の研究知見や災害研究科等の研究機関の教員からの講義を希望する」「地震大国の日本において、内閣府、気象庁、国土交通省、総務省（消防）、警察庁などの各省庁の準備と連携についても知りたい」があった。
- ・地域共生・大学の社会的役割として「地元創生看護や地域共生社会における大学の取り組みなど企画してほしい」があった。

- ・フォーラム継続開催への期待として「フォーラムでは、本当に役立つ情報を提供していただき、助かっています。今後も継続して開催いただきたいです」「本日の福和先生のような専門の方のお話はとてもよい勉強と情報収集の機会になると思いましたので、ぜひ続けていただけるとありがたく存じます」「まだまだ、これから大学として取り組んでいかないといけないので、出された企画について知識を深めていきたい」があった。
- ・開催時期について「2月中旬から下旬が参加させていただきやすいです」「時期・時間は、実習指導があるため平日の夕方か休日に希望します」があった。

ご意見に関する回答

- ・プログラム中に音が途切れることが数回あり、申し訳ございませんでした。
- ・開催時期等は、アンケート上では例年と回答に大きな変化もありませんでしたが、ご意見も参考にさせていただきます。
- ・オンデマンド配信のご希望も多いのですが、ご講演者のご負担も大きくなりますので、今後の検討といたします。ご講演者の資料については掲載させていただいています。
- ・今後開催してほしい企画に関しては、今後の参考にさせていただくとともにこれまでのフォーラムでも取りあげてきた内容も多く、今年度同様に資料を残しておりますので、参考にいただければ幸いです。